リアルとバーチャルを超えて
－コロナ禍における非同期型 COIL（Collaborative Online International Learning）の活用事例－

難波 美芸

キーワード：非同期型 COIL、オンライン異文化交流、タイ

概要

本論文では、非同期型 COIL（Collaborative Online International Learning）の実施事例から、その可能性について考察する。非同期型の遠隔授業は、同期型授業や対面授業にはない特徴や利点があるものの、日本において積極的に論じられるようになったのはごく最近のことである。これには、COVID-19の感染拡大による遠隔授業への移行という不可抗力の事態において、できるだけ「リアル」に近いコミュニケーションを求める力が働いたことが一因としてあげられる。さらに、その背景には、オンライン上のコミュニケーションが希薄な人間関係を生むというネガティブな評価が存在する。本稿では、文字でのやり取りを主とする非同期型 COIL の事例から、このような「非同期型の忌避」を乗り越え、そのポジティブな側面に焦点を当てる。そこで、鹿児島大学とタイのブーラパー大学との間で行った非同期型 COIL 授業において見られた学生間の交流の実例を紹介する。その上で、対面式のコミュニケーションこそが真正で人間的なものであるという前提を問い直し、内容本意の異文化コミュニケーションを授業内で実践する教育ツールとして、非同期型 COIL 授業が持つ特徴を示していく。

Ⅰ．COVID-19と COIL

COIL（Collaborative Online International Learning: オンライン国際協働学習）は、2006年に設置されたニューヨーク州立大学 COIL センターによって世界的に広められてきた国際教育の方法である（SUNY COIL Center, 2021）。COIL は、先進国の大学で作られた教育コンテンツをオンラインで他国の教育現場に提供するような、従来の一方向的なオンライン教育ではなく、これを双方向的な協働学習へと転化させることで開発された。学習者の海外渡航の制限や経済的理由による格差を是正するものとして期待され、日本を含む各国の大学で取り入れられてきたが、特に日本で実施大学が増加したきっかけとしては、「大学の世界展開力強化事業」を挙げることができる。「大学の世界展開力強化事業」は、グローバル人材の育成と大学教育のグローバル化を目指し、大学のトランスナショナルな教育連携の取り組みを支援することを目的として、文部科学省において2011年度から開始された事業である。同事業は「平成30年度『大学の世界展開力強化事業』～ COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」に参加する高等教育機関の募集を行い、これが日本における COIL 普及の直接的な誘引となった。鹿児島大学もまた、2018年度に同事業に採択され、米国、アジアの諸連携大学との間での交流を、実渡航と COIL を併用して行ってきた。

COIL はいわゆる異文化コミュニケーションや言語学習、教育学など、従来から「交流」や「対話」といった実践的なコミュニケーションを重視してきた人文学の領域でその効果を発揮してきただけでなく、むしろ看護学や工学の国際学習を活発化させるものとして取り入れられてきた。たとえば看護学では、多様な経済的、文化的バックグラウンドを持つ患者との接触が増加していくなかで、ケアのあり方を実践的に学ぶのと同時に、学生自身の経済的要因によるグローバル経

験と教育の格差を補正するものとして機能してきた（Potter and Bragadóttir, 2020）。学問分野を問わず、グローバル化と多様化が進む今日では、COIL のような教育方法はますますその重要性を増してきている。

COVID-19の感染拡大をきっかけとして、COIL の広がりはさらに加速化した。海外渡航制限があるなか、COIL は海外研修や留学の代替として取り入れられるようになっていく。2018年度に「大学の世界展開力強化事業」に採択された鹿児島大学においては、COVID-19以前から COIL 型教育を一般教養科目、学部、大学院教育で既に取り入れていたため、パンデミックが始まった時には、既に連携校との間での COIL の実績があった。とはいえ、現在においても全学的な展開は実現できておらず、拡大途上にあるといえる。筆者もまた COIL の専門家ではないものの、COIL を自らの担当科目に取り入れ、さまざまな事例報告を見ながら試行錯誤を行なってきた。本稿で述べるように、パンデミック初期のオンライン授業は、パンデミックによって減少した、対面の、いわゆる「リアル」な接触を補完するため、できるだけ「リアル」に近づけることに努力が注がれていた。本稿で問うのはこの「リアルへのノスタルジー」と呼べるものである。

本稿では、まず、非同期型遠隔授業に対する日本国内での評価について、「ネット世代」が抱えるコミュニケーションや人間関係の問題という背景との関わりから考察する。その上で、COIL の非同期型授業の可能性について考える。次に、筆者が担当した一般教養科目（鹿児島大学では共通教育科目）の「東南アジア研究入門」と、鹿児島大学の「大学の世界展開力強化事業」の連携校であるタイのブーラパー大学で開講されている科目「JAPAN TODAY（日本事情）」との間で行った COIL 授業についての報告を行う。この授業では、テキストメインのオンライン掲示板を用いた極めて「古い」タイプの交流を取り入れている。本稿では、このような非同期型 COIL 授業が持つ特徴から、その可能性と、現代の大学生のインターネットを介した異文化コミュニケーションについて若干の考察を行う。

Ⅱ．非同期型 COIL の可能性

１．日本における非同期型遠隔授業の忌避

COIL は国境を超えた協働学習であるが、本章ではまず、日本国内の大学の遠隔授業に関して COVID-19の感染拡大との関係から述べたい。2020年４月に各種教育機関の一斉休校の措置がとられ、その後、オンライン授業への移行が急ピッチで進められると、オンライン授業はあくまでも対面授業の一時的な代替物として一般的に認識された。COVID-19の感染拡大初期（2020年４月～９月の前期）は、オンラインツールに不慣れな教員が、資料の配布とメールによる質疑応答だけで授業を進めたり、大学が提供する各種 LMS（学習管理システム：Learning Management System）の制約によって音声と資料のみの配信に限られたりと、非同期型の授業も多くみられた[1]。その後、オンライン会議システムが普及すると、基本的には通常の授業と同じように運営可能な同期型の授業が増加する。このような大規模な変化が、約４週間という極めて短い期間に起こったのである。

不可抗力的なオンラインへの移行は、世界各国の学生にグローバルな協働学習を平等に提供するという COIL の本来の目的を見えにくくしてしまったことも事実である。遠隔授業の移行が進むと、障がいを持つ学生や、パンデミック以前から教室という空間での問題を感じていた学生に

[1] 筆者は、2020 年度は都内五校の大学で非常勤講師として人類学系の授業を担当していたが、ゼミ形式の授業も含まれていたことから、オンラインへの移行においては、フィールドワークを重視する人類学の授業をどのように運営するかで非常に大きな困難に直面した。また、各大学で用いる LMS が異なること、ごく初期の段階ではオンライン授業運営に対する規定も大きく異なったことも混乱の原因となった。だが、五校それぞれの授業環境に対する考え方を知ることができ、本稿の執筆においても、この時に得られた比較の視点が役立っている。

とってのポジティブな側面も報告された。一方で、パンデミック初期の遠隔授業への移行に対する学生たちからのネガティブな評価は、学習機会の質的な低下や施設の利用の禁止などを理由に、一部の学生が学費返還を求めた署名活動を始めたことなどからも窺える。

そこには「リアルへのノスタルジー」ともいえるような力が働いていた。相手の視線の動きや相槌、息遣いを感じられる対面でのコミュニケーションに勝るものはない――そうした前提から、多くの教育者は、いかにしてオンライン授業をよりリアルなものへと近づけられるかを模索し、オンライン会議システムを提供する各社も自社のサービスの向上を目指して奔走した。ヴァーチャルリアリティ技術を用いたオンライン協働学習の開発はこの顕著な例だろう。オンライン学習にはさまざまな形態が存在し、方法間での優越というよりも、学習内容や目的、参加者の属性によって適切な方法が存在すると考えられるが、パンデミックがもたらしたのは、それによって失われた物理的な接触や対面でのコミュニケーションへのノスタルジーと、それが駆動力となって進められたリアルへの接近の努力であった。

こうしたライブ感を重視するリアルへの接近が見られる一方で、感染拡大初期の時期は特に、非同期型のオンライン授業は対面授業の一時的で不完全な代替物であるとして、積極的にその可能性が検討されていたとは言い難い。これには、日本国内におけるインターネットを介したコミュニケーションと、それによってもたらされた若者の人間関係の変化に対するネガティブな評価が関わっているのではないだろうか。

ソーシャルメディアをはじめとするオンラインでのコミュニケーションツールが、私たちの人間関係やコミュニケーションのあり方を変えてきたことは間違いない。そして、しばしばそれは従来よりも希薄な人間関係をもたらすものとしてネガティブに捉えられてきた。日本においては、電話から携帯メールへの移行に伴い「【会話による同期的コミュニケーションから文字のやり取りによる選択非同期的コミュニケーション】へ」の変化を経た後、「【必然的に希薄となる人間関係】の反動のように【「つながり」を求める】ようになった」結果、現在ではソーシャルメディアが普及している（村上, 2018a）[2]。しばしば「ネット依存」や「SNS 依存」などと呼ばれるように、リアルを蔑ろにし、オンラインでの人間関係に集中していることが「ネットいじめ」や人間関係の希薄化などの要因になっていると論じられてきたのである。

確かに、現代の「デジタルネイティブ世代」（Prensky, 2001）は、ソーシャルメディアの多くに存在する「いいね」機能のような、気軽な承認と共感を多用し、そこで築かれ、維持される人間関係は、相手を傷つけたり自らが傷ついたりするリスクを回避するような「無難な人間関係」（正木 , 2018: 123）になりがちであるといわれる。デジタルネイティブ世代の多くは、既存のリアルな人間関係の維持のためにオンラインツールを用いることが多く、そこでは過剰とも捉えられるような相手への気遣いや、いわゆる「空気を読むこと」、争いを回避する表面的なコミュニケーションで満ちているといわれる。一方で、一度も直接会ったことのないオンライン上だけでの人間関係については、ソーシャルメディア上での誹謗中傷が社会問題となっていることが示しているように、しばしば極めて攻撃的な発言と応戦的なコミュニケーションが行われていることも事実だろう。加えて、リアルな人間関係を反映したオンライン上でも行われるいわゆる「ネットいじめ」（萩上 , 2008）も存在しており、従来のいじめ以上に「逃げ場のない」いじめの実態

[2] 村上（2018a; 2018b）は、ポケベルからスマートフォンまでの通信技術の発達史と、各種ソーシャルメディアサイトの比較と考察及び、自身の学生たちのコミュニケーション事例から、スマホ利用による若者のコミュニケーションの変容を網羅的に論じている。村上（2018a: 153）はさらに、日本においては「公共の場での通話は NG という、電車などで今もアナウンスされる「車内ではマナーモードに切り替え、通話はお控えください」という日本独自のマナーが通話よりメールの普及を加速させる原因になった」と述べている。日本では「声のやりとり」よりも「文字のやりとり」が普及した一つの要因と言えるだろう。このことは、文字の外側にある情報をできるだけ反映させようとした結果、日本で絵文字が開発されたこととも関わっていると考えられる。

がますます問題化している。

こうしたオンライン上のコミュニケーションの増加に対するネガティブな評価と、COVID-19の感染拡大を受けての直接的なコミュニケーションの減少とが結びつき、とりわけ顔の見えない非同期型のオンライン授業は、「可能であるならば避けるべきもの」であるという認識が広く日本の教員の間で認識されたのではないだろうか。特に現在の大学教員はデジタルネイティブ世代以上の年齢層であることから、こうした傾向になることは否定できない。

２．非同期型 COIL

世界的には、パンデミックによる遠隔授業への転換が起きて一年が過ぎた頃から、完全同期型のオンライン授業への依存度を低下させる傾向が見られる（Hill 2020）。日本国内では、遠隔授業での非同期型の利点と、同期型、対面授業とのハイブリッド型を用いた授業の「個別最適化」（上村ほか, 2021）が積極的に検討されるようになってきたのはごく最近の流れである[3]。これは、ライブセッションによって引き起こされる、いわゆる「Zoom 疲れ」や、パンデミックによるライフスタイルの変化に対応するという側面もあるが、一年が経過した頃から、オンライン学習の利点を理解した上で、オンライン学習だからこそ可能な柔軟な学習方法を、教員たちが模索し始めたことによるだろう。

一方、COIL の文脈では、もとより非同期型の授業も積極的に取り入れてきた上、パンデミック以前からその普及と方法論の確立のためにさまざまな事例を検討してきた。COIL には同期型（シンクロ型）、非同期型（アシンクロ型）、両者を組み合わせたハイブリッド型がある[4]。同期型では、リアルタイムで Zoom や Google Meet などのオンライン会議システムを用いて交流を行い、非同期型では動画やファイルの共有、テキストメッセージのやり取りを一定期間内に行う。

非同期型の COIL の特徴と利点については、いくつかの先行事例から抽出することができる。例えば山本ら（2020）は、「COIL 形式の授業では直接面接型の臨場感のある学びの共有が物理的にできないため、受講者がいつでもどこでも、つまり、“24／7”で「いつでも同じページで」学んでいるという学習環境を維持、継続することが必要」（2020：110）とし、Fripgrid、Padlet や Google Drive など、各種クラウドサービスの検討を通じて、二国間での協働授業の方法について報告している。非同期型の COIL 授業はその設計が重要であり、使用するオンラインサービスによって得られる学習体験が大きく異なってくることがわかる。

また、COIL は国際協働授業であるため、学生同士の言語の問題がある。例えば日本語教育を学ぶ日本人学生と日本語を学ぶ海外の学生の交流であれば、言語教育に関する学びと言語そのものの学びが交差することになるが、多くのケースでは参加学生同士は同じ獲得目標に向かっていずれかが第二言語、あるいは両者ともに第二言語で交流することになる（例えば日本とアジアの学生が英語で交流するなど）。例えば、高橋ら（2021）は日米間での幼児教育系授業の Padlet を用いた非同期型 COIL について事例報告を行っている。高橋ら（2021：65）は、英語での交流に

---

[3] 上村ら（2021）は、COVID-19 によってもたらされた大学教育環境のパラダイムシフトを不可逆的な変化として認識し、デジタル技術を用いたポストコロナ時代の大学教育のあり方について、教職員の働き方や施設のあり方、大学経営までも含む多角的な視点から論じ、オンライン授業と対面授業を組み合わせた教育方法の提案を行っている。

[4] COIL の詳しい運営方法については、その開発主体であるニューヨーク州立大学 COIL センターのホームページを参照されたい（SUNY COIL Center, 2021）。単位取得を前提とすることなど、詳細な方法についても学ぶことができる。また、日本国内の事例については、全国に先駆けて COIL を導入した関西大学のグローバル教育イノベーション推進機構（IIGE: Institute for Innovative Global Education）のホームページを参照されたい（IIGE, 2021）。同大学を中心に、2018 年度「大学の世界展開力強化事業」に採択された鹿児島大学を含む全国 13 大学が発起人大学となり、JPN-COIL 協議会が発足している。協議会では、海外大学とのマッチングや講師派遣、個別相談など、COIL 促進のためのさまざまな取り組みを行っている。

ついて「英語での交流という点が難しかったが、非同期型でハワイの学生と交流をしたため、自動翻訳アプリを活用しながら、時間をかけて英語を書き、互いに深い内容まで理解することができた」と述べている。次に取り上げる筆者が担当したCOIL授業はインターネット掲示板を使用した非同期型授業であるが、これと同様の状況が確認された。

日本において非同期型遠隔授業は「リアルへのノスタルジー」から忌避されがちな部分もあったが、2018年度の「大学の世界展開力強化事業」によって開始されたCOILというベースが存在したことで、パンデミック２年目に入ったことと相俟って、改めてその可能性が認識されるようになってきたといえる。以下では、鹿児島大学（以下、KU）とタイのブーラパー大学（以下、BUU）との間で行ったCOIL授業について報告を行い、非同期型COILの特徴と可能性について考える。

Ⅲ.「東南アジア研究入門」×「JAPAN TODAY」COIL

１．授業の概要

このCOIL授業では、ビデオ二作品を両国の学生たちが授業内で視聴し、ウェブ掲示板を使用して、学生がコメントや質問、回答や感想を投稿するという方法を取った。学生間の交流は2021年７月から約１ヶ月間かけて行い、最後に両担当教員が総括ビデオを作成・配信し、学生たちが交流全体に対する感想コメントを投稿して終了した。

基本情報	
実施形態	非同期型
実施期間	2021年７月１日～2021年７月29日
相手校 担当教員・所属	ブーラパー大学（タイ） ナンチャヤー・マハカン（人文社会科学部・東洋言語学科）
実施授業科目名	KU：東南アジア研究入門 BUU：JAPAN TODAY（日本事情）
使用言語	日本語
使用プラットフォーム	無料レンタルインターネット掲示板　“Z-Z Board”[5]
使用教材（ビデオ）	(1) Paneu Saeng-Xuto『おもいやりを』（京都大学東南アジア地域研究研究所配信）[6]　全編タイ語、日本語字幕付き。 (2) NHK for School『アクティブ10公民』「企業ってなにするところ？」[7]　全編日本語、日本語字幕付き。
参加学生人数[8]	KU：37名 BUU：42名

[5] 掲示板入室時にはパスワードの入力を必要とするため、パスワードを知っている参加学生のみが掲示板の閲覧、投稿をすることができる。機能や使い勝手という点ではGoogle Classroomが理想的であったが、参加にはそもそもGoogleのアカウントを持っていなければならず、加えて授業登録が必要である点が煩わしい。そのため、(１) URLとパスワードを知っていればアクセス可能、(２) コメントの投稿が容易、(３) シンプルなデザイン（インターネットの接続環境に左右されず、詳細な説明を読まなくても直感的に使用可能）、という３点から、本サイトを利用した。ただし、表示される言語は日本語のみである。以下からアクセス可能：https://z-z.jp

[6] 以下からアクセス可能：https://youtu.be/fGIOLaKx3xQ

[7] 以下からアクセス可能：https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005120495_00000

[8] 受講者数ではなく、実際にコメント投稿を通して参加した学生数。

２．目的、授業計画と事前授業

BUU のナンチャヤー教授とは事前に Zoom で打ち合わせを行い、具体的な方法について話し合った。ナンチャヤー教授は既に2019年度から、KU の別の教員との間で同期型の COIL 授業を行っている。（詳しくは、本号掲載の、畝田谷桂子「オンライン国際交流教育によるグローバルコンピテンス育成の一考察：タイ王国ブーラパー大学とのオンライン国際協働学習の試み」を参照。）タイと日本の時差は２時間であるため、同期型の授業を行うことは不可能ではないものの、お互いに新学期が既に始まり、授業時間を合わせることができなかったため、非同期型で行うことになった。教材としてビデオを使用することとし、ナンチャヤー教授と筆者がそれぞれ一つずつビデオを持ち寄ることになった。筆者が選んだ『おもいやりを』は、タイ・バンコクで暮らすトランジェンダーの中学生である主人公を取り巻く世界を描いたドキュメンタリー短編映画である。ナンチャヤー教授が担当する科目「JAPAN TODAY」の履修者は、日本語レベルが高い高学年の学生たちであり、この授業では NHK のオンライン教材を用いて日本の近年の状況を理解する目的のもと行われている。そこで、ナンチャヤー教授はこの教材のうちの一つ、『企業ってなにするところ？』を選び、ここでは現在の日本人が持つ労働観や、クラウドファンディングを使った起業の事例などが取り上げられている。

本 COIL の目的は、日本とタイの学生が、それぞれの社会で培ってきた価値観や認識の仕方に触れ、自らの当たり前を問い直すことである。ジェンダーと労働観というテーマは、いずれも多くの大学生に関心を持ってもらいたい、また、実際に関心のあるものであり、加えて、日本とタイ両国においても共通する現代的なテーマであるという点を、ナンチャヤー教授とも確認した。使用言語は日本語であり、BUU の学生の日本語レベルはかなり高いが、コミュニケーションの内容を重視すると、時間をかけた交流が可能な非同期型が最適であった。

「東南アジア研究入門」では、『おもいやりを』の視聴前後に、ビデオの内容と深く関わるトランスジェンダーやクロスドレッサー、同性愛者などセクシュアルマイノリティ（以下、LGBTQ+）をめぐる昨今の人文社会科学における議論に関して初歩的な講義を行った上で、東南アジアにおける性の多様性の事例を伝統芸能の分野や儀礼での文脈から紹介した。この時、タイの事例として、筆者自身のフィールドワークの経験から、日常的に、デパートやレストランなどでトランスジェンダーの従業員を見かけることや、一方で就職先の職種に偏りがあること、「カトゥーイ（MtF）」や「トム（男装するレズビアン）」など、外見や立ち振る舞いと恋愛対象によって分類された非常に多くのローカルタームが存在することなどを紹介した。授業では毎回リアクションペーパーの提出を義務付けているが、40名ほどの履修者のうち二名が、LGBTQ+ に対して「ネガティブな印象」を持っている旨を記述していたほか、直接そのような記述ではなくとも、LGBTQ+ に対して寛容な社会を少子化と結びつけて問題化している内容のコメントを書いた学生もいた。翌週のフィードバックの時間には、こうしたコメント内容について匿名で紹介し、掲示板の交流においては、自らの意見についてその理由や背景を説明できる限りにおいて、正直に記述することを求めた。LGBTQ+ について否定的な考えを持っているということについて、タイの学生からの応答を聞く良い機会であると考えたためである。

『企業ってなにするとこ？』を視聴する際には、筆者の研究調査地であるラオスの生業複合なども含め、生業に関する基本的な説明を行った上で、現代における労働のあり方について、東南アジア諸国の転職率のデータからライフコースと就労の関係について講義を行った。リアクションペーパーでは、たとえば日本の学生にとっては当たり前である「新卒採用」という規範について、東南アジア諸国ではほとんど存在しないことに触れ驚いたといったコメントがいくつか見られた。

掲示板を用いた実際の交流を始めるにあたり、「東南アジア研究入門」の学生には、日本語学習者に向けて、「やさしい日本語」で書くことの重要性を伝えた。その際、「やさしい日本語」と

「簡単で稚拙なコメント」を書くことの違いを確認し、あくまで同世代の学生との交流であること、内容本意の交流を目指していることを強調して説明した。

３．交流内容

以下ではビデオを視聴した上で行った実際の掲示板上でのやりとりの方法について、期間ごとに区切って説明していく。

図１　実際の掲示板のイメージ。学生の本名は一部黒塗りにした（以下同じ）。

第０週：事前準備。スレッドを三つ用意し、一つ目には『おもいやりを』（図１）、二つ目には『企業ってなにするとこ？』の動画のリンクと、投稿と返信の方法を最初のコメントに示した。三つ目のスレッドは総括用に用意した。

第１週：一つ目のスレッドに、『おもいやりを』の内容から疑問に思ったことを、KU の学生が BUU の学生に向けて質問形式で投稿する。（７月１日に掲示板へのリンクを配布）

第２週：一つ目のスレッドで、KU の学生の疑問に BUU の学生が答える。二つ目のスレッドに、『企業ってなにするとこ？』の内容から疑問に思ったことを、BUU の学生が KU の学生に向けて質問形式で投稿する。

第３週：二つ目のスレッドで、BUU の学生の疑問に KU の学生が答える。この間、一つ目のスレッドも含め、掲示板は常にオープンな状態であるため、他方からもらった回答に対するさらなる返信のやりとりも行われた。

第４週：両教員がコメントを熟読した上で、総括動画を作成し、三つ目のスレッドに掲載した。学生はそれを視聴した上で、交流全体に対する感想を投稿する。（７月25日に動画配信。最終コメントは８月４日。KU 側の授業最終日は８月５日）

Ⅳ．「内容本意」の交流

１．一つ目のスレッド：『おもいやりを』から得られた学生の理解

掲示板でのやりとりにおいては、出会ったばかりの学生同士の対面／同期型の限られた時間内での交流で出るとは考えにくいような、かなり突っ込んだ質問やコメントも見られた。たとえば、タイには、外見や立ち振る舞いと恋愛対象によって分類された多くの呼び名が存在することについて「タイは LGBT の楽園と言われるほど LGBT に対する理解がある国だと思っていたが、現実このような差別もあるとなると、どういった理由で楽園と言われているのか？また18もの性を外見で区別することに意味はあるのかと思う。」といったやや否定的とも取れる質問や、「タイの性別の種類の多さに驚きました。これまで生活をしてきて性別の種類が多くて良かったと思うことはありますか？反対にこんなに性別の種類はいらないと思うことはありますか？」といった同様の質問に対して、BUU の学生からは、以下のような率直な意見が寄せられている。

・タイの社会ではまだ LGBTQ+ を受け入れない人がいます。しかし、家族や友人から

の受け入れはとても重要だと思います。ジェンダーの種類が多いのは良いことだと思います。誰もが好きなジェンダーを選べて嬉しいです。それは個人の権利だからです。
・私はそれを考えたことはありません。男性でも女性でもLGBTQ+でも、誰もが社会に共存できるからです。

（掲示板より抜粋　2021年７月２日投稿）

また、映画の中では差別の存在も明確に示されており、さらに主人公が通う学校ではトランスジェンダーの教師も教鞭をとっている。これに対する驚きと、これは一般的なことなのか特殊なことなのかというKUの学生からの問いかけに対してはBUUの学生から以下のような回答があった。

『トランスジェンダーの先生がいることは、子どもたちのジェンダーに関する選択を広げる』生徒にもちろん影響がある。でも、人によって違います。なぜなら、自分はトランスジェンダーだったら、トランスジェンダーの先生を見れば、大勢のトランスジェンダーは『自分はトランスジェンダーでも先生になれますよ。』と考えて、自分の立場を表せるようになります。
『LGBTQの人は大企業に受け入れられない』と考え方は現在でもありますが、最近、性別を問わずにその人の実力に大切します。過去より、LGBTQは大企業と社会に受け入れるようになるといわれています。

（掲示板より抜粋　2021年７月５日投稿）

しばしば「LGBTQ+の楽園」のような表象のされ方をするタイであるが、根強く存在する差別や、地方と都市での受け入れられ方の違い、また、映画の内容は古いものであり現在はよりLGBTQ+の人々を取り巻く環境は改善されているといった指摘など、非常に多くのコメントがあり、スレッドの投稿上限である100コメントを超えていた。

２.二つ目のスレッド：『企業ってなにするところ？』で焚き付けられたKUの学生

二つ目のスレッドではまずBUUの学生からKUの学生に対して質問が寄せられたが、日本語を学習する学生たちの多くは日系企業や日本での就職を目指していることもあり、どのような企業の商品を買いたい、あるいは買いたくないと考えるか、といった具体的な質問が目立った。また、ビデオ教材の中で説明されているクラウドファンディングのシステムを始めて知ったBUUの学生が多く、クラウドファンディングのより詳しい仕組みや、どのようなビジネスがクラウドファンディングによって始まっているかなどを問う学生も多かった。

ビデオ教材の中では日本で行われている女性による起業支援についての説明がなされており、これに対する質問も見られた。KUの学生からの回答は、やや言葉が難しくなっているが、以下のようなものだった。

日本には、いくつかの女性の起業を支援するための助成金・補助金があります。両立支援等助成金の女性活躍加速化コースは女性向けの制度です。自分で計画書を作成し、目標の２つ以上が達成された時に、最大で60万円支給されます。これは毎年行われている制度です。
また、地方公共団体だけでなく、民間団体でも女性の起業家を支援しようという取り組みが行われています。

次に、二つ目の質問にお答えします。大学を卒業していない人でも起業することができます。日本では、女子高校生が起業したこともありました。

（掲示板より抜粋　2021年７月15日投稿）

後で触れるが、事前授業で触れた内容以上の回答を書いている学生がほとんどであり、聞かれている問いに答えるために、KU の学生たちは自らリサーチを行い、必要な知識を補い、回答を行なっていた。問いかけへの応答という必要に迫られた結果、自発的なリサーチが促されたといえる。これは、その場で回答しなければいけない同期型 COIL では不可能である。

３. 三つ目のスレッド：総括

三つ目のスレッドでは筆者とナンチャヤー教授の両者が、交流全体を見た上での振り返りと、補足が必要な点について説明を行った。その上で、交流全体に対する学生たちからのコメントを投稿してもらった。既述の通り、特に二つ目のスレッドで KU の学生たちが回答する側に回ると、自ら調べる必要が出てくるケースが多かったため、「質問に答えることは難しかったですが、日本の企業について調べるなかで自分も初めて知った部分もありました。今後はさらにタイの歴史や文化についてもっと知りたいし皆さんともさらに交流を深めることができたらいいなと感じました。」といったコメントが KU の学生から投稿されていた。更なる知識欲につながったといえる。

また、インターネット掲示板という、いわゆる「SNS 世代」にとっては古い媒体を用いた今回の交流が、メディアリテラシー教育にもつながった点が KU の学生のコメントから見受けられた。

文面のみの交流ではあったが、だからこそ、相手のことを考えた言葉選びが重要になってきた。SNS が普及する中で、言葉に鈍感になっている部分があったが、相手に失礼にならない、相手を思いやる言葉選びの必要性についても改めて考える良い機会となった。

（掲示板より抜粋　2021年７月31日投稿）

匿名性の高いソーシャルメディアでのやり取りについてこのような振り返りが本授業を通して導かれたことは意図せざる効果となった。

BUU の学生からのレビューも概ねポジティブなものであった。「私はあなたのすべてのコメントから日本語を学び、日本人が LGBTQ ＋についてどう思うかを学びました。とても良い経験になりました。」といった日本語学習と異文化交流両者について学びがあった点のほか、「今回の交流活動を通して日本の企業だけではなく自国に関する問題も分かってきます。」といった、他者との交わりを通して自らの社会、文化を見つめ直すという本 COIL 授業の目的が果たされたことがわかる内容の感想が寄せられた。

４．本授業における非同期型 COIL の利点

今回の交流では、文字でのやりとりであるが故に、両校の学生共に自らのペースで考え、KU の学生は「伝わる日本語」を書くように努め、日本語を学習する BUU の学生もまた、知らない単語を調べたり、翻訳ツールを使ったりする十分な時間があった。そのため、問われている／答えられている内容を、双方がしっかりと理解した「丁寧な」交流ができたのではないだろうか。もちろん、対面でのコミュニケーションにおける即興的でスピーディーな反応や、とりわけ異文

化状況における会話で起こりうる相互理解の困難といった要素は極めて重要な経験であり、そのようなコミュニケーションは本授業を通して得られるものではない。だが、「お互いの意見を交換する」という側面から考えると、口頭での対話よりも効果的に行われ、成功していると考えられる。

前期終了時に提出してもらった「東南アジア研究入門」講義全体に対するリアクションペーパーでは、半数近くの学生が、COIL 授業をもっとも印象的だった授業内容として挙げ、実際に同年代のタイの学生と交流したことによって、自らが LGBTQ+ に対して持っていた偏見や、仕事について持っていた考えが変化したということを述べている。KU 側の事前授業では LGBTQ+ に関する講義を行ったわけだが、既述の通り、授業内で提出されるリアクションペーパーからは、LGBTQ+ に対する否定的なコメントや戸惑いが、ごく僅かであるが見られた。だが、当該の学生を含む多くの学生が、BUU の学生の反応に触れることで、理解を深めることができたという感想を書いている。

加えて、「私がした質問について返信が来ることが素直にうれしかった。」「現地に行って留学できたような錯覚を起こすくらい東南アジアに触れた機会となった。」といったコメントもあり、非同期型であることに対する不満などは出なかった。

アジア諸国への留学や海外研修の報告書などでは、参加学生が現地の学生の学習意欲や生き方に対する意識の高さに感銘を受けたという例が非常に多く書かれているが、これは本 COIL 授業に参加した学生のコメントでも見られた。

> この授業ではコイル授業とフィードバックが良かったと思う。コイル授業は掲示板でも感想を書いた通り、タイのブーラパー大学の学生の考え方を知ることができた。特にタイの学生の質問の中に「ビジネスをするならどのようなビジネスをしたいですか」や「日本の社会が必要としている活動をしている会社はどこですか」などと日常から考えていないと答えられないような質問が多くあり、意識の高さを感じた。私には起業はできないだろうと今後の候補の中にもなかったのでそのような態度を改めないといけないと思った。また、日本人学生がどのような疑問を抱いているのか知るのも良い機会だった。
>
> （リアクションペーパーより抜粋）

このような気づきは、内容本意の交流であったからこそ得られたものであると考えられる。

また、より技術的な効果としては、掲示板を通したやりとりでは、コメント掲載時に、気軽に他のウェブサイトや動画を参照することができる（図２）。これは同期型授業でも、チャット画面を通じてできることではあるが、限られた時間のなかでそこまでの作業をすることは難しいだろう。各スレッドにおける質問と回答には、それぞれ１週間の期限を暫定的に設けていたが（これは KU 側においては、授業参加度をはかる成績評価のための措置でもある）、

図２　KU 学生の「ビデオに出てくる踊りはなんですか？」という質問に対する BUU 学生からの回答

先述の通り、学生は各自のタイミングで時間をかけてコメントを書くことができるため、この点においては自由度が高い上、現代の若者の「シェアする」という一つのコミュニケーションのあり方にもうまく合致しているといえる。

Ⅴ．今後の展開

コロナ禍において海外への渡航が困難となる中、COIL をはじめとするオンラインツールを使用した海外の学生との交流型授業は、より一層重要度を増しているが、多様な技術の使用が可能になってきた段階から、「よりリアルな交流」に近づけることが、――しばしばそれが具体的に何を意味するかは問わないまま――よしとされてきたきらいがある。こうした潮流に対して、今回行った COIL は極めて「古い」かたちのコミュニケーションである。だが、とりわけ文字でのやり取りが早い段階から普及していた日本において、現在のデジタルネイティブ世代は、対面の口頭でのコミュニケーションを「リアル」とし、テキストでのウェブ上のコミュニケーションを「ヴァーチャル」とする二項対立的な世界の捉え方をしているわけではない。ソーシャルメディアを現実の人間関係の維持のために用いているケースも多いなかで、それを「希薄」と捉えるのは外部からの視点でしかない。対面の「リアル」なコミュニケーションの方が真正で人間的であるという前提自体を、デジタルネイティブ世代以上の年代の人間は意識的に疑う必要があるだろう。

繰り返しになるが、会話における瞬発力や傾聴の姿勢を学ぶには同期型授業の方が効果的であるし、海外への実渡航で得られる五感を使った経験と学びを、COIL を通して得ることはできない。国際教育においては、達成目標に応じて非同期型、同期型 COIL、そして実渡航を組み合わせた総合的なプログラムが必要であるという点をここで再度強調しておきたい。

最後に、COIL においては、語学力のみならず異文化対応能力の伸長といった効果を可視化するために BEVI（Beliefs, Events, and Values Inventory）などの分析ツールを用いて効果検証することが推奨され、また、課題にもなっている（池田，2020：25）。COIL 型教育は、COVID-19 によって意図せぬ形で広まったものの、日本においてはそもそも「大学の世界展開力強化事業」として促進されたものであることから、高等教育機関の国際化という目標に向けた国家的なプロジェクトである。そのため、COIL 導入による学習効果を定量的に可視化することが求められるのは、近年ますます強まる高等教育機関における「監査文化」（Shore and Wright, 1999）との関わりから考えれば当然の動きであろう。監査文化が浸透した現在、定量化しなければ教員も、あるいは学習した本人すらも、その効果を実感できないような事態が発生しつつある。

今回の COIL では BEVI 等を用いた効果の定量化は行っていない。これは監査文化に対するささやかな抵抗というわけではないが、ある種のスコアを上げるために授業自体が設計されるようになったり、学生の参加態度が方向付けられたりするようになれば、本末転倒である。本稿では、複雑なクラウドサービスではなく、デジタルネイティブ以上の世代でも使用可能な極めて簡素な方法を用いた非同期型 COIL 授業の一例として、その特徴と効果について分析を行った。本稿で行った分析は印象論に留まる部分があるかもしれないが、定性的な事例報告として、計画、設計、実施に至るまでの猥雑さから COIL 導入に踏み切れない教員の一助となれば幸いである。

謝辞

学生にコメント投稿を促し、全てのコメントを見た上で総括ビデオを作成・配信するには一定の時間を要する。さらに、タイでは新学期が始まって間もない時期というタイミングであったため、今回の COIL 授業の共同制作を協力的に進めてくれた BUU のナンチャヤー先生には心からの感謝を述べたい。また、COVID-19渦で海外渡航が制限され、本来行う予定であったタイへの

実渡航が中止となったなか、本授業を履修し、意欲的にCOIL授業に参加した学生たちにも感謝したい。

参照文献

Hill, Phil. (2020) Revised Outlook for Higher Ed's Online Response to COVID-19. https://philonedtech.com/revised-outlook-for-higher-eds-online-response-to-covid-19/（2020年3月31日投稿）

IIGE. (2021) https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/COIL/（最終閲覧日：2021年12月1日）

Shore, Cris and Wright, Susan. (1999) Audit Culture and Anthropology: Neo-Liberalism in British Higher Education. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*. 5 (4). 557–575.

Potter, Teddie and Bragadóttir, Helga. (2020) Collaborative Online International Learning (COIL): a new model of global education. Dyson, Sue and McAllister, Margaret (eds.), *Routledge International Handbook of Nurse Education*. Routledge. pp. 103–114.

Prensky, Mark. (2001) Digital Natives, Digital Immigrants Part 1. *On the Horizon*. 9 (5) 1-6.

SUNY COIL Center. (2021) https://coil.suny.edu（最終閲覧日：2021年12月1日）

池田佳子（2020）「ICTを活用し海外の学生と行う国際連携型の協働学習「COIL」の教育効果と課題」，*JUCE Journal*, 2. 20–25.

上村敏之ら（2021）「ポストコロナ時代の大学教育――関西学院大学を事例に」，『関西学院大学高等教育研究』11. 53–84.

萩上チキ（2008）『ネットいじめ』PHP新書 .

村上信夫（2018a）「スマホ利用による若者のコミュニケーションの変容（上）――SNSは若者の感性を変えたのか」『茨城大学人文社会科学部紀要 . 人文コミュニケーション学論集』2. 145–167.

村上信夫（2018b）「スマホ利用による若者のコミュニケーションの変容（下）――SNSは若者の感性を変えたのか」『茨城大学人文社会科学部紀要 . 人文コミュニケーション学論集』3. 51–70.

山本敏幸ら（2020）「COIL型授業でアカデミック・インテグリティを実践した授業報告――台湾、致理科技大學と本学のアカデミック・ライティング」，『関西大学高等教育研究』11. 109–114.

（以上）

Beyond the Real and Virtual：A Case Study of Asynchronous COIL (Collaborative Online International Learning) under COVID-19 Pandemic

NAMBA Miki

Keywords: Asynchronous COIL, Online international communication, Thailand

Abstract

This paper discusses the potential of asynchronous COIL (Collaborative Online International Learning). Although asynchronous remote learning in general has some advantages and features that are not found in synchronous remote learning or in-person classes, it has been underestimated and only recently been actively promoted in Japan. One of the reasons for this is that in the situation of an unavoidable shift to remote learning due to COVID-19 outbreaks, there has been a strong desire for communication to be as close to "real" as possible. In addition, in the context of Japan, online communication has long been negatively evaluated and accused as a cause of weakening human relationships. This paper attempts to overcome such tendency of avoiding the asynchronous online communication and focuses on its positive aspects. To address this concern, this paper provides an actual example of student interaction observed in an asynchronous COIL class conducted between Kagoshima University in Japan and Burapha University in Thailand. It will then question the assumption that in-person communication is more authentic and humanistic, and show the characteristics of asynchronous COIL classes as an educational tool for practicing content-oriented cross-cultural communication in the classroom.